

氏 名		何 静
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 42 号
学位授与年月日		令和 8 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件		学位規則第 4 条第 1 項該当者
題 目	学位論文題目	覚知の探求によるインスタレーション表現 —主体性の減少と身体の拡がり—
	研究作品題目	あなたが消える前に
論文審査委員		主 査 教 授 倉地 久 副 査 教 授 高橋 信行 副 査 教 授 小西 信之 外 部 名古屋大学大学院情報学研究科 審査委員 教 授 秋庭 史典

1 学位論文の要旨

本論文は、筆者が「覚知」への関心を契機として展開してきたインスタレーション制作を対象に、制作主体として作品の中心から退くことによって、身体経験がどのように生成されるのかを考察するものである。本論文でいう主体性の減少とは、筆者が作品の意味や経験をあらかじめ決定し、それを観者に与える中心として振る舞うのではなく、場所の構造、物質、光、時間、観者の移動といった外部の条件との関係へと制作の重心を移していく方法を指す。論文題目に掲げる「覚知」は、この方法によって身体と外界との関係が組み替えられる過程において、意味や判断に先立って生じる状態として位置づけられる。したがって本論文におけるインスタレーション表現は、作品を筆者の内面や思考の表現結果としてではなく、身体と外界との接触が観者自身の経験として生じ直すための条件として捉えられる。

第一章では、「覚知」を、知覚のうちで対象への意識が自己と外部世界との関係へと反転する状態として位置づけた。覚知とは、具体的な対象に気づくことにとどまらず、対象へ向かっていた意識が「見ている自分」へと向かい直し、身体を媒介として自己と外部世界との関係が組み替えられ始める状態である。本章では、覚知の現れ方を、経験している自己への繊細な自覚と、主客の境界が揺らぎ外部世界との隔たりが薄れていく意識の変容という二つの層から整理した。そのうえで、内なる意識の深まりと外部世界への拡がりと呼応し合う状態を「共振」として捉えた。

第二章では、前章で整理した覚知の共振的な状態が、インスタレーション表現においてどのような身体的・空間的条件のもとで生じるのかを検討した。インスタレーションは、作品を単一の視点から把握される対象として提示するのではなく、観者の身体を空間や環境の中へ引き入れ、移動、視線の転換、時間の経過、距離の変化を通して身体的経験を成立させる表現形式である。本章では、クレア・ビショップによる「観る主体の活性化」と「脱中心化された主体」の議論を参照しながら、インスタレーションが観者の身体的関与を促し、作品を単一の視点から統御的に把握する主体のあり方を、移動、距離、時間の中で組み替える

ことを論じた。そのうえで、このような作品構造を、筆者の主体性の減少と、観者自身の身体経験の生成を考察するための理論的前提として位置づけた。

第三章では、筆者の前期作品を通して、制作の関心が個人的体験の表現から、他者との距離や応答を含む関係の考察へ、さらに空間的条件の構成へと移行していく過程を検討した。遠く離れた他者との共同制作は、自己の経験が他者との関係の中で変化しうることを意識する契機となり、仙厓の《○△□》との出会いは、形態の象徴的意味よりも、関係、視線、意識の移動に注目する視点を形成した。これにより、前期作品は、筆者の内面を提示する制作から、身体と外界との関係が生じる空間的条件を構成する制作への転換点として位置づけられる。

第四章では、岐阜県飛騨市宮川町種蔵集落で開催された「光射す器 種蔵の影」展において発表した三つのインスタレーション作品を中心に、インスタレーション構成の重心が、筆者自身の感覚や意図から、場所の痕跡、環境条件、観者の身体経験へと移行していく過程を分析した。《Sudden Light 2021.11.13-11.28》では、板倉の建築構造や光の入り方に反応しながらも、筆者はその場所を、自身の感覚や内面的経験を受け止める容器として扱っていた。そのため、場所に蓄積された記憶は、まだ制作の主要な条件として十分には意識されていなかった。《今 気づいた 2022.11.12-12.11》では、板倉に残された遺物、故人の記憶、土地に蓄積された時間が制作の条件として作用し、場所は痕跡と観者の経験が交差する場として捉え直された。《洞窟に戻る 2023.11.11-12.10》では、筆者自身の心臓音を、板倉、坂道、観者の移動を結びつける媒介として用いた。坂道を上った後の観者の身体感覚と、板倉内部から聞こえる微かな心臓音が重なり合い、作品は複数の身体が場所と音を介して共振する経験条件として成立した。

第五章では、前章で確認した制作主体の後退を受け、《壁》シリーズを通して、主体性の減少がより自覚的な空間構成の方法として展開される過程を考察した。豊田という展示場所の記憶と筆者自身の記憶をつなぐ繭という素材を介しながら、制作の関心は壁のもつ境界性へと移行した。壁は、内と外、明と暗、こちら側と向こう側を分けると同時に、分けられたもの同士の関係を生じさせる構造である。筆者は、展示空間の既存構成を読み取り、文字、糸、映像、光、観者の動線を組み合わせることで、壁の境界性を、分断された要素が再び関係を結ぶための構造へと組み替えた。観者は壁の周囲を移動し、見ること、見落とすこと、再び気づくことを通して、その関係の変化を身体的に経験する。

第六章では、前章で考察した壁の境界性を踏まえ、作品要素をさらに絞り込み、身体がその場にある状態そのものへと制作の重心を移した。《私でなくなる時 2025.10.23-10.30》では、透明なアクリルを唯一の実物とし、透過と反射を同時に生じさせる透明な壁として扱った。投影の方向へ向かう視線と、遅れて意識される反射面の像との時間差によって、見る位置、映像の表裏、身体の前後の関係が問い直される。古い写真がもたらす記憶や情報は、透明なアクリルを一時的に通過する像として現れ、その構造を通して身体は、外界との接触が生じ続ける透明な境界として捉え直された。

以上の考察を通して、本論文は、主体性の減少を、筆者の経験や記憶を作品の意味として固定する態度から離れ、観者の身体経験が生じるための条件へと制作の重心を移していく方法として位置づけた。一連の制作において筆者は、暗喩やモチーフの過密さが身体と空間の接触を曖昧にする場合があることを確認し、後期の作品では構成要素を絞り込んだ。観者

は、作品の現場で見ることを、気づくことを、移動することを、立ち止まることを通して、自らの身体がその場で外界と関係していることを捉え直す。ここにおいて身体の拡がりとは、インスタレーションを介して、身体が場所、時間、記憶、他者との関係へと開かれていく状態である。

2 学位論文審査の要旨

何静による研究『覚知の探求によるインスタレーション表現—主体性の減少と身体の拡がり—』は、「覚知」の概念に基づき、身体性の意義を体験的に提示するインスタレーション表現と、その理論的考察を目的とする実践的研究である。

身体の消失感を伴う体験を契機に生まれた《Sudden light》シリーズを起点とし、覚知と知覚という相互補完的な認識様態のうち、覚知に立脚した主体性と身体性を視座に据え、版画・映像・写真を空間的に構成する体験的提示によるインスタレーション制作と、その理論的考察を博士後期課程において展開してきた。

「知覚」が五感を通して対象を把握するプロセスであるのに対し、「覚知」は身体を媒介として内側から外界を捉えるプロセスであるという前提に立つ。主客の境界を超え、身体を通じて外部とつながるために、内的に再構成される認識として「覚知」が存在し、本論全体を貫く共通キーワードとなり、インスタレーション作品へと転化されている点が特徴的である。覚知は、対象に気づくことではなく「気づいている自分への気づき」を含む意識の質的变化であり、身体を媒介に主客の境界が曖昧になる意識の変容を指す。そしてそれは、主体性を減少させることと身体の拡がりを促すことが同一の方向性にあると捉えられる。

【論文】

本論は、筆者自身の非日常的体験を起点に、現代において希薄化した身体性を再考し、主体と客体の境界が揺らぐ意識状態をインスタレーション表現としてどのように具現化できるかを論じたものである。特に、「知覚」と「覚知」を対比的に捉え、「対象を把握する意識」ではなく「把握しようとする自己の意識そのもの」に着目する「覚知」の概念を軸に、身体を外界と対立する存在ではなく、事象が通過していく場として捉え直している点が本論の特徴である。

第1章および第2章では、一般的な知覚と「覚知」の構造的相違を整理し、「いま・ここ」の身体的実感を喚起する表現形式として、インスタレーションの有効性が理論的に示されている。これにより、本研究全体の概念的基盤が構築されている。

第3章では、《Self-reflection 2020.7.22-7.24》および《Sudden Light》連作を分析し、映像や版画、既成品を用いた多層的構成によって、自己と他者、直線的ではない時間や空間の関係性を探究している。併せて、仙厓義梵《○△□》の再解釈を通じ、認識の変化を制作プロセスや表現形式の変容として反映させる姿勢が示されている。

第4章では、岐阜県飛騨市の種蔵集落での三つの実践作品を通じ、作者の意図を前景化する制作態度から、場所や環境に委ねる「主体性の減少」へと転換していく過程が記述されている。この転換は、筆者の制作思想における重要な深化として評価できる。

第5章では、《pay attention 2024.10.26-11.3》および《壁》シリーズを取り上げ、本来空間を隔てる存在である「壁」を、外部と接触する身体として再定義している。作家の主体性を意識的に後退させることで、物理的境界が環境や他者につながる接点へと変容し、「身

体の拡がり」が感得されるプロセスが示されている。

第6章では、身体の根源的感覚である触覚に着目し、映像作品《私でなくなる時 2025.10.23-10.30》を通して、自己と他者の境界が曖昧化し、「私」が消失していく知覚の過程が実践的に提示されている。触覚的行為と視覚表現を重ね合わせる構成は、本論の主題である「主体性の減少」と「身体の拡がり」を効果的に体現している。本論は理論と制作実践を往還しながら一貫したテーマを深化させており、独自の身体観と表現方法を提示した点は評価に値する。

【作品】

最終審査作品《あなたが消える前に》は、本来は展示場所と密接に連動して成立するインスタレーションであり、最終審査の展示環境は理想的な条件とは異なる。そのため、本作単体の完成度だけでなく、これまでの制作で展開されてきた作品群との連続性を踏まえて評価する必要がある。

《知らないと知る前》では、「主体性の減少」をテーマに、主体と対象、内と外の境界が曖昧になる感覚が探究された。《洞窟に戻る》では、親しい人の死を契機に、空間を記憶の蓄積として扱い、明確な動線を排することで、鑑賞者の身体と環境が共鳴する体験が構成された。ここでは作者の主体性が抑えられ、環境との一体化が重視されている。

また、《壁》シリーズでは、壁を「分けるもの」から「つなぐもの」へと再解釈し、身体と空間、外部との関係性が可視化された。《神殿が始まる時》では、写真とアクリルを用い、記憶と身体の境界の曖昧さを示すことで、身体が「私のもの」を超えて外部とつながる場として再構築されている。これらの作品を通して一貫しているのは、近代的な主体性を弱め、身体を環境・他者・記憶に開かれた存在として捉え直そうとする姿勢である。《あなたが消える前に》は、その到達点として、身体の境界が揺らぐ体験をインスタレーションとして提示する試みであり、制作の継続性と思想的深化がみられ創造性・独創性・表現力の観点から高く評価された。

【口頭発表】

口頭発表では、研究要旨の説明と論文各章の解説をベースにしながら、後半は特に論文テーマにある、主体性の減少と身体の拡がりを重点に口述した。対象を把握し支配するという近代的な主体性を問い直し、身体が外部と共鳴する体験を通じて、その境界がどのように揺らぎうるかを研究してきた。インスタレーション表現は、鑑賞者が介入・操作する対象ではなく、身体と空間、さらには他者や記憶との関係性を再構築するための装置として機能している。その中で身体は、自己に閉じた存在ではなく、環境に開かれた存在として立ち現れる。ここで提示した「身体の拡がり」とは、身体の物理的拡張を意味するのではなく、自己を超えて環境や記憶、他者とつながる経験の可能性を開くものである。この点において、本研究および制作は、身体と主体性の在り方を再考する試みとして評価することができる。

以上のように、何静はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

本研究および制作は、身体性とインスタレーション表現をめぐる近年の議論に対し、独自の視点から重要な示唆を与えるものである。特に、知覚から覚知的体験への移行を、作品制作の変遷と密接に関連づけながら論じている点は評価できる。

第一に、身体を「固定された主体」ではなく「経験の場」として再定義しようとする理論的姿勢が明確であり、近代的主体性の再検討という今日的課題に応答している点が特筆される。知覚と覚知という二層構造を導入し、身体と外部環境の境界が揺らぐプロセスを制作実践と結びつけて論じた点は、身体論・芸術実践双方において意義深い。

第二に、インスタレーションを「鑑賞者が内部で体験を更新する装置」として捉え、その特性を身体の拡張性と結びつけて論じている点は、空間芸術の本質を鋭く捉えている。作品を“外から見る対象”ではなく“共鳴する環境”として扱う視点は、従来の展示概念を超えるものであり、評価に値する。

第三に、制作の各段階において、身体と空間の関係性がどのように変容していったかを丁寧に分析している点が優れている。

以上の点を総合し、本研究は覚知の探求に基づく身体性の拡張という主題を、実験的かつ挑戦的なインスタレーション作品として高度に結実させたものであり、博士後期課程の学位論文として十分な創造性・独創性・表現力を備え、あわせて口頭発表時の指摘事項についても論文への適切な反映が可能であると判断した。

最終試験において、何静は、このような研究成果を発表し、その成績は、博士の学位を与えるに十分であった。